

主 題：重荷を下ろしてくびきを負う

聖書箇所：マタイの福音書 11章28－30節

「私はすべてを捧げます。私のすばらしい救い主、私のすべてを捧げます」、クリスチャンである者が常に歌っているべき歌詞がここに記されているように思います（聖歌541「みなささげまつり」）。ただ残念ながら、今、私たちが様々なところで耳にする教会でのメッセージにこのことばが欠けています。パウロは自分の生涯の最後に、愛する信仰の子であったテモテに対してこのようなメッセージを伝えました。彼はこう言います。Ⅱテモテ4：2－5「**2 みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。3** というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言うてもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、**4 真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。5** しかし、あなたは、どのようなばあいにも慎み、困難に耐え、伝道者として働き、自分の務めを十分に果たしなさい。」彼はやがてやって来るあるひとつの時を指してこの警告をテモテに与えました。人々が自分の聞きたいことを聞くために教師を集めるようになると。そして、そのような時代はやって来ました。今、私たちはそのような時代に生きています。単に人々が、自分の聞きたい、自分の耳に心地よいメッセージを語ってくれる人たちを求めるようになっただけでなく、私たちは今、メッセージを語る者たちができるだけ人々の耳に聞こえのいいメッセージを語ろうとしている、そのような時代に生きています。確かに、だれもいやなメッセージ、厳しいメッセージ、嫌いなメッセージを聞きたいとは思わないでしょう。それゆえに、そのような人たちが考えている、感じている必要を満たすために、出来るだけ厳しくない優しい暖かい朗らかな柔らかいメッセージを語ろうと努める人たちが増えて来ています。彼らはそのように心がけるゆえに、みことばの真理を水で薄めてしまいました。聖書は非常に厳しいことばを私たちに語り伝えます。けれども、出来るだけその厳しさを取り除こうとするなら、必然的にそのメッセージは段々と変えられて行きます。確かに、ある人々は良い動機のもとにそのことをしたのでしょうか。多くの人にメッセージを聞いてもらいたい、多くの人たちがそのことばに耳を傾けるように、そう思ってそのようなことをしたのかもしれませんが。けれども、もたらされた結果というのは、聖書の語るメッセージが語られなくなってしまったということでした。パウロはこのような時代がやって来ることを知っていたゆえに、テモテに対してこのような命令を与えるのです。

パウロは言いました。Ⅱテモテ4：2「**みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。**」、続けて言います。5節「**しかし、あなたは、どのようなばあいにも慎み、困難に耐え、伝道者として働き、自分の務めを十分に果たしなさい。**」、この命令は実は、テモテだけではなく今を生きる私たちクリスチャンにも適用されるべき命令です。みことばを伝えなければいけません。私たちは神によって救われた者として、救いを知らない人たちに対して伝道者として働き、私たちに与えられている務めを十分に果たす責任があるのです。それをするために、私たちは何よりもこの福音のメッセージを正しく理解しなければいけません。イエスが私たちに對して良い知らせとして伝えたこと、イエスによって完成された救いを私たちは正しく理解しなければいけないし、その救いがどのように提供されているのかということ、私たちはしっかりと分かっているなければいけません。残念なことに、今日、キリスト教会の中でこの福音のメッセージが変わって行っています。それはまるで中世のカトリック教会が、救いのメッセージを曲げてしまったのと同じように。イエス・キリストが語った福音から外れたことを語り、今日の福音には罪からの悔い改めや、イエス・キリストに対する完全な献身という概念が取り除かれているのです。確かに、これらのことばを使うことがあるかもしれませんが。けれども。ほとんどの場合、福音が語られて福音を受け入れがたいというとき、そこに生まれるのは「イエス・キリストを信じればいいですよ、それだけで構いません。他に何も要りません。あなたの罪のためにイエスさまが死んでくださった、それを受け入れましょう。そのままのあなたでいいのですよ。何も変わる必要はありません。神さまがあなたを受け入れてくださるから。」と、それはまるで、イエス・キリストのことを私たちの願いを何でも叶えてくれる魔法の手のようにしています。地獄に行きたくないのですか？イエスを信じて、イエスにお願いすれば大丈夫ですよ、あなたの人生はどうですか？あなたの人生は辛いのですか？イエスを信じて、イエスにお願いしたらいいですよと。

けれども、イエスが語った福音はそのようなものではありません。多くの説教者たちは言います。「イエス・キリストが私たちのために死んでくださったということを受け入れさえすれば、神は天国に入れてくださる」と。多くの人たちはこのように言います。「罪からの悔い改めや、イエス・キリストに従順

に従って行くことは、救いの条件ではありません。なぜなら、それは人間の行ないだから」と。また、多くの人たちは言います。「それらの変化や、悔い改めや、イエス・キリストに対する従順、献身というのは、未信者への要求ではありません。それは救われたクリスチャンが弟子となり、より良いクリスチャンになるために、イエスがなした要求なのだ」と。だから、救いの条件ではない、救いは信じることによって、それだけでいい、弟子となるためには従順に生きることだと言います。これ程真理からかけ離れた教えはありません。

先週、先々週と、私たちはマルコ 8 : 34 - 38 でイエスのことばを見ましたが、イエスが弟子を呼び求めた時に、イエスは救われた者たちがより献身した者になるために弟子作りをしていたのではありません。イエスが「自分を捨て自分の十字架を負って、わたしについて来なさい。わたしに従って来なさい。」と言ったとき、なぜ、それをしなければいけなかったのでしょうか？覚えておられますか？自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、自分のいのちを失う者はそれを受けるからです。いのちと死の問題だったのです。たとえ、全世界を手に入れたとしても、自分のいのちを損じたら、何の得になるのでしょうか！と、それはイエスに従うというメッセージに対してイエスがされた説明です。イエスが言われたことは「信じさえすればいいのです」ではなかったのです。「信じるということはわたしに従って来ることなのだ、自分を捨て、自分の十字架を負ってわたしに従って来なければいのちを失うことになる」と、そのように言われたのです。

今朝、私は皆さんと一緒に、もう一箇所、福音に関するイエスのメッセージを見たいと思います。これは多くのメッセンジャーが福音を語る時に伝えること、使うことばです。多くの教会にはこのことばがその教会の入り口に記されていたり、様々な看板やチラシにこのことばが使われています。イエスはここでその公生涯の中で語られた人々に対する招きの中で、最もすばらしい招きをされています。事実、この箇所は多くの方々がもうすでに暗唱されています。マタイの福音書 11 章 28 節です。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」

私たちはこのイエスがされた「招き」のことばを見て行きますが、イエスはここで確かに、「わたしのところに来なさい」と招いています。あなたに休みを与える、安息を与える、別の言い方をすれば、あなたに救いを与えると一言で言っているのです。この救いへの招き、安息への招き、私たちはこのイエスの招きを注意深く見て行きます。そして、そのことを通して、イエスがこの招きをした時、いったい何を語ろうとしていたのか、そのことを正確に知りたいと思います。イエスはここで三つのことを私たちに教えてくれています。

1. 私たちはどのようにこの安息を得ることができるのか？休みを得るために私たちは何をしなければいけないのか？
2. どうすればこの安息を得ることができるのか？
3. なぜ、この安息を得ることができるのか？

この三つの事柄をここでじっくりと見て行きます。そして、何よりも願うことは、私たちがイエスが為さっているこの招きを正しく理解することです。イエスが「わたしのもとに来なさい。わたしが休みを与える」と言われたそのことばの意味、その方法、なぜそれが出来るのか、そのことを私たちがよく知ることによって、確かに、その休みが与えられ、確かに、その休みを体験しながら、私たちがこの人生を、そして、永遠を生きて行くことが出来るようになるのです。そしてまた、そのようにあり続けるためにこの箇所をしっかりと見て行きたいと思います。

マタイ 11 : 28 - 30 「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。:29 わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。:30 わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」

☆イエスの招き

1. 私たちはどのようにこの安息を得ることができるのか？ 28 節

安息を得るために何をしなければならぬのか？このイエスがなされた召し、招待、それはイエスが語られた招待、召しの中で最もすばらしいものであると言っても構わないでしょう。ここに書かれていることばは、非常に心温まる、私たちに安心を与えるようなメッセージあることは間違いありません。しかし、私たちがしっかり理解しなければいけないことは、この文脈の中で、イエスがこの招きを、実は、イエスを信じる事がなかった町々に対するのろいのことばを語ったそのすぐ後に語られているということです。イエスは人々が自分のことを拒絶していたことをよく知っていました。イエスは神の働きに応答しない行為に対してのろいを宣言しながら、私たちに對して招きをされるのです。恵み深い主はこのような状況の中で私たちに招きを与えるのです。「わたしのところに来なさい。わたしがあなたがた

を休ませてあげます。」と。先ず、28節には二つの事柄を見ることが出来ます。いったいどうすれば私たちがこの安らぎを得ることができるのか？何をするによって安息を得ることができるのか？イエスはこのことに関してここで二つの事柄を教えています。「召しと約束」です。28節を大きく区分するなら「召し」の部分と「約束」の部分に分けることが出来ます。

1) イエス・キリストの召し

(1) 私たちはキリストのもとに行かなければいけない

私たちが何をしなければならないか、イエスは言います「**わたしのところに来なさい。**」と。ここで私たちは「来なさい」という命令形の動詞を見ますが、原文では、ここでは動詞は使われていません。この「**来なさい**」ということば、実はこれは28節の文頭に出てきます。確かに、このことばは動詞ではないのです。厳密に言えば、これは助動詞なのですが、このことばをもってイエスは私たちに招きを与えておられます。このように訳すのは間違っていない。ただ、興味深いことは、このことばを注意深く調べると分かるのです。この「来なさい」と訳されていることばは新約聖書の中に11回使われています。10回は福音書に1回は黙示録ですが、すべてこのことばはだれかが他の人を招待するとき、「こっちに来てください」というときに使うことばです。

例えば、このことばはイエスがペテロとその兄弟アンデレを招いたときに使ったことばです。マタイ4:19「**イエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう。」、「わたしについて来なさい」ということばがここで使われている「来なさい」と同じことばです。また、イエスとの会話を終えたサマリヤの女がスカルの町に戻って人々に言います。ヨハネ4:29「**来て、見てください。私のしたこと全部を私に言った人がいるのです。この方がキリストなのでしょうか。」、「来て、見てください」と同じことばを使っています。また、マタイ28:6ではイエスの復活の日の朝、墓にやって来た女たちに対して天使がこのように言います。「ここにはおられません。前から言っておられたように、よみがえられたからです。来て、納めてあった場所を見てごらんください。」、「来て、…見てごらんください。」が同じことばです。このことばが使われる時に、そこで言われていることは「さあ、どうぞこっちに来て来てください」という招きのことばなのです。ある註解者はこのことばについてこのような説明をしています。「この「来なさい」ということばは、語っている人の積極的な思い、「来てください」という積極的な思いを表わし、また、招かれている人たちが喜んですぐにやって来て欲しいというその願望を表わすことばだ」と。分かりますね？サマリヤの女がスカルの人たちに「来て、見てください。」と言った思い、まさにその思いではありませんか？イエスはそのことばをもって「来なさい」と呼びかけているのです。どこに行くのでしょうか？イエスのところへ。****

「**わたしのところに来なさい**」ということばは、この文章の中で特に強調されている訳ではないのですが、でも、私たちはこのことばの重要性を無視することは出来ません。特に、27節でイエスが語ったことばを見た時に、私たちはなぜイエスのところに行かなければいけないのか？ということを明確に知ることが出来ます。イエスはこのように言われました。27節「**すべてのものが、わたしの父から、わたしに渡されています。それで、父のほかには、子を知る者がなく、子と、子が父を知らせようと心に定めた人のほかは、だれも父を知る者がありません。」、「わたししか天の神のことを知っている人はいません。またわたししかこの方を正しく伝えることができる者はいません。」と。それゆえに、人々はイエスのもとに来なければいけなかったのです。神のことを知るために、神の真理を理解するために、人々が行くべきところはイエス・キリスト以外のどこでもなかったのです。イエスのもとに来なければいけなかった、イエスは言われました。ヨハネ14:6「**わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」**、今すぐに喜んでわたしのところに来てください、なぜなら、わたしだけが天の父を知っているし、わたしだけが天の父について伝えることが出来るから、だから、今すぐにやって来なさいと言われるのです。**

ここでもう一つのことに私たちは気付かなければいけません。それはこの「**来なさい**」ということばに含まれている非常に大切な真実です。「**来なさい**」と言うには、招かれている人たちはまだイエスのもとにはいなかったということです。イエスといっしょにいたのなら、イエスの方に進んでいたのなら、人々に「**来なさい**」とは言わないはず。つまり、イエスが語っている相手というのは、イエスのもとにまだ来ていない人です。そのことを私たちが理解するために少し文脈を見ましょう。マタイの福音書11章、そこでマタイはいくつかの事柄を私たちに教えてくれていますが、7節から14節までにマタイはイエスがバプテスマのヨハネについて語っているその記事を記しています。バプテスマのヨハネについて語っています。イエスの言うことを簡潔にまとめるなら「バプテスマのヨハネはわたしがやって来るための道をととのえるためにやって来た。バプテスマのヨハネは旧約聖書の預言者たちがそうだったように、人々が救い主を受け入れるために必要な働きをして来た」と、そのことをイエスは告げたのです。ところが、人々はこのバプテスマのヨハネのメッセージに耳を傾けたでしょうか？問題はそこにあった

のです。特に、この後16-24節までを見ると、イエスがそこで語っていることは明白になります。バプテスマのヨハネが神の御国の到来が近いことを告げ、メシヤがやって来ることを人々に教えていたにもかかわらず、人々は残念ながら、バプテスマのヨハネのことばに正しく耳を傾けることをしませんでした。それだけではありません。実際に救い主であるイエス・キリストがやって来た時、人々はそのメッセージを聞きました。イエスは言いました。「わたしがメシヤであり、わたしが神の子である」と。しかも、そのメッセージをイエスは多くの奇蹟をもって確かに正しいことを証明しました。けれども、人々はそのイエス・キリストを受け入れることをしなかったのです。だから、20-24節でイエスが数々の力あるわざを行なわれたのに、悔い改めることをしなかった町々に対して、のろいのことばを投げかけています、「のろわれよ」と。人々はまさにこのような方向に進んでいたのです。メシヤがやって来て「来なさい、わたしのところに今すぐに、喜んでやって来なさい。わたしが道を示すことができるのだから。」と言っていたにもかかわらず、人々はイエスに耳を傾けるのではなく、心を向けるのではなく、むしろ、それから反対の方へと進んでいたのです。それゆえに、イエスは周りにいた群衆に向かって、自分の行なったすばらしいみわざ、そのことばに耳を向けることなく、悔い改めることをしなかった町々に対してのろいのことばを語ったその直後に、招きのことばをかけるのです。このように喜んで罪の中を生きる人たちがたくさんいる中であって、イエスは切実に人々に向かって「わたしのもとに来なければいけませんよ」と訴えるのです。それがイエスが求めたことです。「わたしのところに来なさい。方向を変えなさい。進んでいるところから立ち返ってわたしの方へやって来なさい。わたしのもとに来なさい。」と。

(2) だれが召されているのか

もう一つ、この召しから私たちが考えなければいけないことは「だれが召されているのか」ということです。イエスは言いました、「**すべて、疲れている人、重荷を負っている人は、**」と。そのことを私たちが正しく理解しなければこの「召し」を理解することは出来ません。この「**疲れた人**」、ここで使われている「**疲れる**」ということば、それは非常に激しい大変な労働、または、旅行をしてそれゆえに疲れ切ってしまった様子です。もうこれ以上一步も進むことが出来ない、そのように疲労困憊している姿を現わすのです。事実、このことばはヨハネの福音書4:6で、イエスが長い一日の旅の中でサマリヤの井戸のところにやってきたときに、いかにイエスが疲労していたのかを表わすことばとして使われています。「**そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅の疲れで、井戸のかたわらに腰をおろしておられた。時は六時ごろであった。**」、「**疲れきっている**」、このことばは様々な苦しい働きをし続けて来たゆえに、もう疲れ果ててしまっている人のことを指してイエスは語っているのです。イエスはこのことばを使われたときに、ただ単に、肉体的な疲労のことを話していたのではありません。肉体的に一日の働きが大変で疲れ切った人たちに「**わたしのもとに来なさい**」と言ったのではないのです。イエスが言われているのは霊的なことです。一生懸命、神に喜ばれることは何なのかということを考えながら、それを実際に行なって行こうとしながら、全くそこに行き着くことが出来ず、「**いったい私はどうすればいいのだろうか？**」と言って、絶望の中で疲れ果てている人たちのことを言っているのです。神が喜ばれることを求めながら、救いの道を一生懸命探しながら、一度たりともそこに足を踏み入れることが出来ないその関係に疲れ果てて、この人生を生きて行くことに疲れってしまった、イエスはその人たちに向かって呼びかけているのです。加えて、イエスは「**重荷を負っている人は、**」と言います。この「**重荷を負う**」ということば、この動詞は新約聖書の中でも非常にまれな動詞です。実に、この箇所とルカの福音書11:46にしか使われていません。確かに「**重荷**」ということが何を指しているのか、私たちは正確に知ることは出来ません。なぜなら、イエスはこの重荷が何なのか具体的に説明していないからです。けれども、私たちがこのことばをこの文脈の中で聞く時に、当時のユダヤ人たちが背負わされていた非常に大きな重荷のことを考えずにはおられません。イエスは実際に、このことをルカの福音書11:46で「**あなたがた律法の専門家たちも忌まわしいものだ。あなたがたは、人々には負いきれない荷物を負わせるが、自分は、その荷物に指一本もさわろうとはしない。**」と言われています。何のことでしょう？律法学者やパリサイ人たちは様々な規律を作って「**これを守っていたらあなたがたは天の御国に入ることが出来ますよ。**」と言っていたそのことです。そのような基準が人々の上に重くのしかかり、一般の人たちは自分たちにはとても出来ないと、そのことに悩み苦しんでいたのです。これをしなければいけない、あれをしなければいけないと、そのような重荷の中で彼らはもがき苦しんでいました。なぜなら、彼らはそのような要求を全うすることは出来ないことを、自らの生活の中でよく理解していたからです。イエスはマタイの福音書23:4で「**また、彼らは重い荷をくくって、人の肩に載せ、自分はそれに指一本さわろうとはしません。**」と言われました。これもイエスがパリサイ人や律法学者たちに向けて語ったことばです。当時のユダヤ人たちは重荷を背負っていたのです。旧約聖書の律法というより、むしろ、人間が作り出した様々な規律を背負わされて、これらを守っていたら天の御国に入ることが出来ますよと言われる、でも、彼らはそれを守ることが出来ま

せんでした。だから、それは重かったのです。だから、それらを背負うことに疲れ果てていたのです。いったい、どうすれば私は天国に行くことができるのだろうか？いったい、どうすれば私には安らぎがあるのだろうか、どこまで行っても私はこの重荷のもとに置かれ、どこまで行っても私には苦しみしか待っていないと、イエスが招かれた人、その人たちはそのような苦しみの中にいたのです。そのような苦しみのもとに置かれていることをよく分かっている人たちでした。

イエスが招かれた人たちは、自分自身の知恵や力で救いを追い求めることの虚しさに気付き始めていた人たちでした。自分の努力によって完全な安らぎを手に入れることが不可能であるということに気付いた人たちでした。一生懸命、正しくありたいと願って努力すればするほどいかに自分がそれを行なうことが出来ないのかということに気付いて行く人たちでした。自分の手で安らぎを手に入れようとすればするほど、自分の人生の様々な重荷のゆえに安らぎを感じることに出来ないことに気付いていたのです。イエスはそのような人たちを招いておられたのです。その理解をしている人たちにこのことばをかけられたのです。マッカーサー先生は注解書の中でこのようなことばを語っておられます。「この『**すべて疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。**』』ということばは、私たちに至福の教えの第一番目を彷彿させる。マタイの福音書5章3節です。『**幸いなかな、心の貧しき者**』、このことは確かに、聞いているすべての人たちに対する招きであるけれども、でも、イエスはその招きを、あたかも自分が確かに霊的な重荷を負っていて、神の前にどうしようもない、疲れ果てて何もすることが出来ない者であるということと正しく理解する人たちだけが、この招きに答えることが出来るかのように呼びかけておられる。」と。条件ははっきりしています。自分がこのようにどうしようもない、疲れ果てて重荷を負ってもう進むことが出来ない、自分の力では何もすることが出来ないということに気付いている人たちが、この招きに与ることが出来るのです。別の言い方をすれば、私は大丈夫だと思っている人にはこの招きは適用しないのです。皆さん、覚えておられますか？イエスは何のためにこの地上にやって来られましたか？ルカ5：31-32でイエスはそのことを私たちにはっきりと教えてくれています。「**そこで、イエスは答えて言われた。「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。：32 わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです。」**」、イエスは言われました。「大丈夫です、私は疲れてはいません。私の重荷はそんなに重くありません。私の力で天を勝ち得るが出来るし、私の力で幸いを、安息を、安らぎを感じる事ができるようになります。」と、そのように思っている人たちは招かれていないのです。自分の状態を正しく理解し、自分の力で生きることが出来ない、自分の手で自分の願っていることを勝ち得ることのない、そのような愚かさ、虚しさに気付いている者に対して、イエスはこの呼びかけをするのです。

2) イエス・キリストの約束 28節

28節に約束がありました。「**わたしがあなたがたを休ませてあげます。**」、この約束があるからこそ、この召しがすばらしいのです。何をしなければいけなかったのか？イエスのもとに来なければいけなかった。なぜ、イエスのもとに来るべきなのか？それはイエスが「**あなたがたを休ませてあげる**」と言われているからです。この約束はすばらしい約束です。ここでイエスが強調していることは「**わたし**」ということばです。あえて、このように訳すことができます。「わたし、わたしだけが、他のだれでもなくわたしだけが、あなたがたに休みを与えることが出来ます。」と。イエスはそのことを強調されたのです。確かに、この「**休み**」というのは、永遠に続いて行く、未来に与えられる完全な安らぎを指しています。それゆえに、イエスはここで未来形の動詞を使います。けれども同時に、私たちはこの「**安息、休み**」が未来にしか起こらないものであると考えるべきではありません。なぜなら、この後話して行きますが、イエスはここで、重荷を取り除くことを話しているではありません。この後、イエスは「**わたしのくびきを負い**」なさいと言っています。「**わたしの荷は軽いからです。**」と言いました。私たちクリスチャン、イエスのもとに来る者たちは、自分が疲れ果てて重荷を負っていることに気付いた者たちです。イエスのもとにやって来て何をするのでしょう？自分の持っている荷を降ろして、実は、別の荷を担うのです。その荷を担うに当たって、イエスはこの休みを与えるというようにも言っているのです。

まるで、一日の長い旅を終えてようやく宿に着いた旅人が、すばらしい食事を取り、温泉でくつろぎ、一晩ゆっくり睡眠を取ることによって英気を養い、次の日再び、新しい荷を背負って喜び勇んで旅をするかのように。イエスは私たちの毎日の生活の中であって、回復を与え、安らぎを与え、私たちを新鮮な状態にしてくださるのです。それゆえに、イエスが約束してくださったこの安らぎ、安息、それはただ単に、私たちが未来に待ち望むだけではありません。今日、私たちがこのイエスのもとに行く時に、私たちが実際に得ることが出来る安らぎでもあるのです。

何をすべきなのか？「**わたしのもとに来なさい**」と言いました。では、具体的にその「来る」ということはどういうことでしょうか？そのことをイエスは29節で私たちに教えてくれます。

2. どうすればこの安息を得ることが出来るのか？

29節で、イエスは具体的にイエスのもとに来るといことがどのような事柄を含んでいるのかを教えてください。「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。」、文法上このことばは「条件とその結果」を表わす表現が使われています。もし、これらのことをするなら、このようなことが起こりますという、そのような文法上の形を取っているのです。つまり、イエスのことばを意識するなら(文法の語っているとおり)、**「もし、あなたがわたしのくびきを負うなら、(もちろん、わたしはそれを負って欲しいと心から願っています)、また、もしあなたがわたしから学ぶ者になるなら、(わたしはあなたに学んで欲しいと願っています)、そうすると、あなたは自分のたましいに安らぎを安息を見出す。(見つけるようになります)。」**と、このようになります。最初に、私たちはイエスが語っているその条件「来なさい」という内容を考えてみましょう。

1) イエスが私たちに要求していること、条件とは？

イエスが私たちに求められていることは**「あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。」**ということです。このことを理解するために、私たちは一つの大切なことばをよく分かっておかなければいけません。それは**「くびき」**です。皆さん、**「くびき」**ということばを聞いて、具体的にどういうものを想像されますか？その当時、**「くびき」**は木で出来ていました。ある家の主人が自分の動物、牛や馬やろばなどですが、そのようなものに自分の畑を耕させるために、また、石臼を引くためであったり、荷物を背負わせるために、大工さんに頼んでその動物に完全に合うように、木で**「くびき」**を造ってもらったのです。首の部分に木がかかる訳です。それに様々な道具をつけて荷物を引かせたり、石臼を引かせたり、また農耕作業をさせたりするのです。イエスは若い頃大工でした。大工の子として育ち、大工をしながら生計を立てていました。ですから、このような**「くびき」**をたくさん作っていたことでしょう。この**「くびき」**をかけるというのはどういうことを意味しているのでしょうか？先ほども言いましたように、それは様々な作業に使われる訳です。農耕作業をしなければいけないし、重い荷物を引くこともあります。そのようなことから当然のごとく、**「くびき」**ということばは多くのときに、だれかが他の人物の権威のもとに置かれる、そのような状況を表わすことばとして使われるようになりました。くびきがかけられている動物は、その主人の言いなりにならなければなりません。それと同じように、くびきをかけられた人物も、自分の主人の言うように動き、自分の主人に仕える者となったことを表わしたのです。イエスが語っていることはまさにそのことです。この当時、イエスのことばを聞いていた人たちが理解したことは、まさにそのことでした。**「くびきを負う」「わたしのくびきを負う」ということは、わたしの指示のもとにあなたは従い、わたしが負わせるものをあなたは負わなければいけない**ということを言っているのです。**「イエスのもとに来なさい」というその要求は、キリストのもとに従順に従って行くことを指していました。イエスに従うということは、その権威を認め、その方の言われるとおりに生き、働いて行くことです。**

同じように、特に、ユダヤ人の社会の中にあってこの**「くびき」**ということばは、実は教師と生徒の関係を表わすためにも使われていました。教師は生徒に対して、または、弟子に対してこう言うのです。**「あなたはこのように生きなければいけません。これが私の教えです。これを守りなさい。」**と、生徒はそのことばを聞いてそれをしっかりと守るのです。そのことをイエスは二番目に説明しています。**「わたしから学びなさい」**、この**「学ぶ」**という動詞は名詞形の**「弟子」**ということばと非常に密接な関係があります。このことばは、人々がイエスのことばを聞いて、イエスが行なうことを見てそのことを学んで行く姿を表わしています。弟子というのはまさにそのような者でした。自分の師が語ることばに耳を傾け、それをしっかりと理解し、実践する者だったのです。**「学ぶ者」**、イエスは言います。**「わたしのもとに来るには、あなたはわたしから学ぶようにならなければいけない。自分の首にキリストのくびきをつけて、わたしの指示通りに、わたしの荷を負って生きて行かなければいけないし、あなたはそれをするに当たって、わたしから学び続ける者でなくてはならない。」**と。なぜ、イエスから学ばなければいけないのでしょうか？27節に何と書いてありますか？**「すべてのものが、わたしの父から、わたしに渡されています。それで、父のほかには、子を知る者がなく、子と、子が父を知らせようと心に定めた人のほかは、だれも父を知る者ありません。」**、イエスだけが神をご存じで、イエスだけが神を伝えることができる方だったからです。だから、私たちはイエスのもとにやっ来てなければいけなかったのです。だから、私たちはイエスから彼の教えることから学ばなければいけないのです。マタイはもうすでにこの福音書の中で、イエスがいかに正しい教えをなす方なのかということを見せていました。マタイの福音書5章から7章のところで、私たちは**「山上の説教」**を見ることが出来ます。そこでイエスは、律法学者やパリサイ人たちはこのように教えるけれど、わたしはあなた方に言いますと言って、聖書を正しく私たちに教えてくれました。そのメッセージを聞いた人々は驚いたのです、なぜ驚いたのでしょうか？覚えていますか？他の教師たちとは違って、イエスが**「権威ある者のように」**話されたから彼らは驚いたのです。なぜ、**「権威のある者のよう**

に」見えたのでしょうか？イエスは真理をもっておられたからです。そして、マタイは8章、9章を使って、イエスが確かに権威をもっておられることを証明しました。8章－9章には様々な奇蹟が記されています。イエスは自然に対して力を持っておられる、イエスは病に対して力を持っておられる、イエスは罪に対して力を持っておられ、イエスは悪霊たちに対しても力をもっておられる権威者である、そのことをマタイは8章－9章を通して証明するのです。

イエスはただ単に、権威がありそうな方としてメッセージをしたのではなかったのです。イエスは事実、権威ある方であるゆえに、その方が語るメッセージは権威のあるメッセージだったのです。だから人々は、イエスのもとにその権威を認めてイエスに従う者としてくびきを負ってやって来て、イエスに学ぶ者にならなければいけなかったのです。私たちはイエスのもとにそのような決意を持たずにやって来ることは出来ません。私たちは「自分のしたいことが出来るなら、イエスのもとに行きましょう。」などと言ってイエスのもとに来ることは出来ないのです。「私のやりたいように生かしてくださるのだったら、私は喜んでイエスさまを受け入れましょう。」などはあり得ないのです。イエスは言います。「わたしのくびきを負いなさい。わたしの語ることばから、私の示すことから学ぶ者になりなさい。そうしてわたしのもとに来なさい。」と。私たちがイエスのもとに行くとき、私たちはイエスの権威にひざまづくのです、私たちは彼の教えに習うのです。なぜ、そのようなことをしなければいけないのか、よく考えると不思議だと思いませんか？イエスの招いている人物というのは、もうすでに疲れきっていて、もう一歩も動けませんと言っているのです。なぜ、動けなかったのですか？重荷を負っているからです。余りにも、生きて行くことが辛いのです。これ以上もう動くことが出来ません、助けてくださいと言っている人たちです。「では、くびきを負いなさい。これは新しい荷物ですから。」とはなかなか言えないですね。それを聞いて、皆さんがもし倒れていたら、喜んで、「分かりました。それを負います。」と、言えますか？なかなか言えないです。だから、イエスはそこで私たちに説明してくれているのです。

2) どうしてこのような安息を得るのか、動機は？

なぜ、私たちがイエスの「くびきを負って」、なぜ、私たちがイエスに「学ぶ者にならなければ」いけないのでしょうか？イエスは言います。「わたしは心優しく、へりくだっているから」と。この当時生きていた多くの教師たちと違い、イエスは高慢に満ちてはいませんでした。イエスは自分の権威を主張しようとするような方ではなかったのです。イエスはむしろ謙遜に満ちていました。イエスは心優しい方でした。だからこそ、イエスは神であるそのあり方を捨てることができないとは考えないで、人の姿をとって私たちのためにやって来られたのではないですか？よく考えてください。確かに、イエスが求める要求は高いのです。前回見たように、自分を捨て自分を十字架につけなければいけません。これまで生きて来たすべてのことを横に置いて、それをちりあくとあって、私たちはキリストを知る喜びに満ちて生きて行かなければいけないのです。ときに、イエスが求めることに従うことが余りにも困難だと思いませんか？皆さんはこのように言ったことありませんか？「神さま、それは無理です！できません！」と。確かにその通りです。けれども、皆さん、覚えておいてください。イエスが言われる通りです。イエスは「心優しく、へりくだっている」のです。皆さんが「私はもうダメです。あなたが与えてくださっているこの荷は重すぎて、私はもう歩くことができません。」、これでは今までと変わらないではありませんか？私たちがもしこのように言うとするなら、そのときにイエスは何をしてくれるのでしょうか？心優しい方は、私たちの横にやって来てくれるのです。へりくだっているお方は、「それはあなたの責任なのだから、あなたがやればいい。王であるわたしはそんな汚れた働きをすることができません。」などと言わないのです。謙遜に満ちたお方は、私たちと同じ所にやって来られて、私たちを助けてくださるのです。皆さん、思い出してください！この方は、私たちに関するありとあらゆる事柄を知っておられるのです。私たちがいかに弱く罪深いかを、こと細かに、そのすべてをご存じなのです。その方は私たちができないことを要求されません。このお方は私たちができないと思っていることも、できるように助けてくださるのです。このお方は「心優しく、へりくだっている」からです。どこか高いところにいて、私たちのことを遠くから見ながら「ああ、またあの人は失敗している」とは思わないのです。この方は心優しく謙遜に満ちているから、私たちの困難のときに私たちといっしょにいてくださるのです。私たちの肩を抱き、私たちを支え、私たちとともに歩みを進んでくださる、そのようなお方なのです。

だから、私たちは喜んで、疲れ果てている中から「イエスさま、私はあなたのくびきを負います。イエスさま、私はあなたに学びます。」と言うのです。なぜなら、この方は「心優しい」から、この方は私を助けてくださるからです。その決意をもってイエスのもとに行くときに、こんなすばらしい結果が待っているとと言うのです。覚えておられますか？最初に条件があって、その結果がありました。

3) 要求に従った結果は？

もしあなたがたが「わたしのくびきを負って、わたしから学ぶ」ならどうなるのでしょうか？「そうすればたましいに安らぎが来ます。」、これを直訳するとこうなります。「あなたがたは、自分自身のたましいに安ら

ぎを見つけます。」と。28節に記されている「**休ませてあげます**」と非常に近いことが書かれていますが、大きく違う点が一つあります。それは動詞の主語です。28節は、だれが安らぎを与えましたか？イエスはそこで言われました。「わたし、わたしだけが、ほかのだれでもない、わたしこそがこの休みを与えることができるのだ」と。ここで言われていることは「イエスが与える安らぎ」です。主語はイエス・キリストです。29節の主語はだれですか？これは、あなた方です。今ここにおられる皆さん、私たちがイエスのもとに喜んで行くとき、「あなたのくびきを負います、あなたに学ぶ者になります。」と言ってイエスのもとに出て行くときに、私たちは何を見つけますか？自分のたましいに安らぎを見つけることができるのです。なぜ見つけるのでしょうか？イエスが私たちにそれを与えてくださるからです。先ほども言ったように、これは未来の話ではないのです。確かに、未来においても見出します、完全な安らぎを。けれども、今、私たちがイエスのくびきを負って進んで行かなければいけないこのときにも、私たちは安らぎを見出すのです。一日の終わりに、私たちが疲れ果てて帰ってきたときに、イエスによって回復させられるのです。心からの平安を得て生きて行くことができるようになるのです。イエスはそのことを私たちに約束してくださっているのです。

皆さん、実はこの「**そうすればたましいに安らぎが来ます。**」ということばは、イエスはこれを旧約聖書から引用しているのです。エレミヤ書の6章にこの引用されている部分があります。エレミヤ6：16「**主はこう仰せられる。「四つ辻に立って見渡し、昔からの通り道、幸いの道はどこにあるかを尋ね、それを歩んで、あなたがたのいこいを見いだせ。しかし、彼らは『そこを歩まない。』と言った。』**」、残念ながら、新改訳聖書の翻訳は原文で言い表わしていることを的確に訳していないように思います。いくつか聖書を見たのですが、一番的確に訳していると思ったのは文語訳聖書でした。少しことばが難しいのですが聞いてください。「**汝ら道に立て、み古き道につきて、いずれか良きなる道を尋ね、その道に歩め。さらば汝らのたましい安きを得ん。**」、違いが分かりますか？本来はこのように訳すべきでしょう。「**四つ筋に立って見渡し、昔からの通り道、幸いの道がどこにあるかを尋ね、そこを歩め。そうすればあなたがたのいこいを見出す。**」と。イエスはこの最後の部分を引用しているのです。エレミヤはここで神のことばを語っています。イスラエルの民がまるで道に迷った旅人であるかのように示しています。その道に迷った旅人であるイスラエルは、四つ筋に立って迷うのです。「どの道を歩んだらいいのだろう。」と。その旅人に対してエレミヤが言います。「**古き道を歩みなさい。もうすでに語られたでしょう。あなたの行くべき道は示されていたではないですか。モーセがそれを教え、預言者たちがそれを語ってきた。その良き道を見つけ出しそこを歩みなさい。そうすればたましいに安らぎがやって来ます。**」と。イエスは単に、この箇所を引用したのではないだろうと思います。多分、この箇所の成就を思っていたのではないのでしょうか？なぜなら、旧約聖書全体が教えてきたことはだれによって成就されますか？イエス・キリストです。四つ筋に立って進まなければいけなかったところは、イエス・キリストに従う道だったのです。旧約聖書が教えた古い教え、古き道、その良き道、救いへと至るその道というのは、すべてイエス・キリストにつながっていたのです。そして、イエスは言います、「だから、わたしのもとに来なさい。その道を歩みなさい。わたしは心優しくへりくだっているから、喜んでわたしのくびきを負って、わたしに学んで生きて行きなさい。その道を歩むなら、その生き方をするなら、あなたは完全な安らぎを見つけ出す。」と。

これがイエスの求めた、そして、イエスの招いた招きでした。イエスのもとにイエスのくびきを負ってやって来る者というのは、完全な安らぎをもつことができるのです。事実、ありとあらゆる事柄の中にあって、不安や不平を漏らしながら生きることがなくなるのです。なぜなら、イエスを救い主として受け入れるなら、その人が正しくイエスのもとにやって来るなら、その人はイエスが完全なる主権者であることを知り、その方の導きの中にあってすべてが良く働いているということを確認することが出来るからです。私たちはイエスの道を歩むなら、私たちの心を騒がせる必要はありません。皆さん、私たちが不安になって安息がなくなって安らぎがないと思っているそのとき、私たちは残念ながら何をしているのでしょうか？本来ならついているはずのくびきを実は外しているのです。本来なら、イエスの後に従って、イエスの教えに沿って生きているはずなのに、そこから離れて生きようとしているのです。だから、私たちには不安がなくならない、不安に満たされるのです。安らぎが消えるのです。そのときに私たちがしなければいけないことは「くびきをしっかりと負う」ことです。神が求めることに忠実に歩むことです。なぜなら、そこで私たちはイエスだけが与えることができる安らぎを見出すことができるからです。

3. なぜ、この安息を得ることができるのか？

最後に、なぜ、私たちはこの安らぎを、安息を得ることができるのでしょうか？30節にそのことが記されています。「**わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。**」、長く説明する必要はないでしょう。書かれてある通りです。イエスの「**くびきは負いやすい**」というのです。そして、イエスが持たせ

る「荷は軽い」のです。「負いやすい」というこのことばは欄外にもあるように「心地よい」と訳すことができます。皆さん覚えていますか？くびきというのは、一頭一頭の動物に合わせて造られています。私たちが負わなければいけないイエスのくびきというのは、私たち一人ひとりに合わせて作られています。そして、そのくびきというのは負いにくいものではないのです。付けて痛いものではないのです。それは心地よいのです。私たちに喜びと安らぎをもたらすことができるくびきなのです。

また、この「荷」と訳されていることばは重い荷ではないのです。ここで使われていることばは実は、軽い荷物のことを指していることばです。だから軽いのです。イエスは、何ができて何ができないのかをよく分かっているから、私たちに必要なことをしてくださるのです。だから、イエスのくびきは心地よいものであるし、そのくびきにつけられる荷は私たちが背負って生きて行くことが出来るものなのです。「だから、あなたはこれをする事ができますよ、だから、わたしのもとに来なさい」と、イエスは不可能なことを私たちに要求されていません。実は、私たちが本来しなければいけない大切なことを教えてくれているのです。

新約聖書の中には千を超える命令があります。そのすべては私たちクリスチャンがしなければいけないこととして記されています。私たちはその荷を負わなければいけない、その命令を守って生きなければいけません。覚えていますか？イエスは言いました。ヨハネ14：15「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずで。」、ヨハネ15：10「もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。それは、わたしがわたしの父の戒めを守って、わたしの父の愛の中にとどまっているのと同じです。」、また、ヨハネはこのように言いました。Iヨハネ5：3「神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。」、クリスチャンの皆さん、あなたは喜んで荷を負っていますか？負いやすいものとして負っていますか？ある註解者はこのことをこのように要約しています。よく注意して聞いてください。「いったい、何が私たちを重荷から解放放つという荷を負うことほど軽いものがあるだろうか？ いったい、どのようなくびきが私たちが自分の負っているくびきを負ってくださる方を負うこと以上にすばらしいことがあるだろうか？」、もう一度説明しましょう。「私たちの重荷から解放放つことができるという重荷、それを負う以上にすばらしい重荷があるか？それは重荷ではないでしょう。」と。また、私たちが今つけているくびき、それを解放放つことができるくびきがあるとすると、それほどすばらしくくびきはない。それが、イエスが私たちに負わせるくびきであり、それが私たちに對する荷なのです。

イエスが語った福音とはこのようなものでした。イエスが語った福音というのは、何もかも上手く行きますよという宣言ではありませんでした。イエスが求めた召しは、私たちに従順を求める召しでした。私たちが荷を持って歩いていかなければならない道でした。私たちはキリストのもとに来るときに、自分の持っているすべてのものをイエスに投げつけて、後はよろしくと言って生きることが出来る、そのような信仰ではありません。私たちには負わなくてはいけない荷があり、負わなければいなくびきがあるのです。クリスチャンとして生きること、それは安息に満ちた生涯を約束するものではありません。肉体的な安息、事実、それほど間違った理解というのはないかもしれません。

先週あるニュースが私のもとに入ってきました。今現在も続いています、どうぞ彼らのために祈ってください。今、インドで非常に過激なヒンズー教徒たちがクリスチャンたちを迫害しています。インドのオリッサ州という所ですが、その州において非常に過激な迫害が起こっています。その迫害のゆえにもうすでに5万を超える人たちが自分の家から逃げ、ジャングルや森の中に身を隠しています。その地域の警察やその他政府機関は、この迫害に対して何かをするのではなく、むしろ、その迫害が起こることを助けています。そのような中で、多くの人々がいのちを失い、また、それ以上の多くの人々が自分たちの財産を失っています。教会は焼かれました。多くの家が焼かれました。人々はやみの中を恐れおののいて逃げて行きました。ある一人のその地方で牧会をしている先生がこのようなメールを送りました。先日、私の教会のメンバーのある一人の姉妹がオリッサ州で起こっていた非常に過激なヒンズー教徒による迫害についてこのように書いてくれました。彼女の家に何人かのヒンズー教徒たちが押しかけて来て、そして、彼らに対してキリスト教を捨ててヒンズー教に改宗するように求めた。彼らが拒んだことを受けてこのヒンズー教徒たちは、その家族に対して特に、彼女の兄に対してこう迫った。「あなたを殺しますよ、止めないと危害を加えますよ。」と。兄はこのように答えました。「我々はそれでも主イエスを礼拝します。」、そのことばを聞いたヒンズー教徒は怒って「もし本当に改宗しなければ殺す。」と迫りました。そして、彼らはその兄に聞いたそうです、「あなたは殺されることを恐れないのか。」と。彼は言いました。「私はイエス・キリストのために死ぬ準備ができています。私は彼のために喜んで死ぬ。」それでヒンズー教徒たちはこの人物を家族の前で三つに切断しました。そこに一緒にいた伯父を殺し、残りの家族は家を追い出されて今も逃げ続けていると。この人物にとって、イエス・キリストに従うということは冗談半分であることではありませんでした。死に至るまで、イエスに従って行くというこ

とは、妄想の中で、幻想の中で、空想の中で起こることではなく、現実だったのです。けれども、死に至るまで従順であるということは、彼にとって自分のいのちを救うことよりも喜んで行ないたいとする決心だったのです。

皆さんはもしかして聞くかもしれません。「どうしてこんなことが彼の上に起こらないといけないのですか？ いったい、彼はなぜ、そんな死んでも構わないなんて言うことが出来たのですか？」 答えはこうです。イエスのくびきは重くないのです。負しやすいのです。「でもそんなことはひどすぎる、こんな辛いことはないじゃないですか。」と聞くかもしれません。その通りです、ひどすぎます。こんな辛いことはないかもしれません。けれども、皆さん思いませんか？ その道を進むときに、イエスが言われたように、エレミヤが預言したように、人々はそこに真の安らぎを見出すのです。皆さん。用意できていますか？ イエスに従って行くこと。皆さんは進んでおられますか？ くびきを負って。皆さんの人生に最も必要なことは、イエスのもとに来ることです。イエスのくびきを負って、イエスに学ぶ者として、その生涯を生きることです。そうすれば、私たちは真の安らぎを手に入れることができるのです。この地上での生涯、そして、永遠を満足することが出来るのです。